



KOBE MONOGATARI

# 神戸の物語

緒方しげをNOi



メ  
と

本  
店  
さ  
ん

女  
り

## A TASTY NEW YEAR'86

今年、木下真珠は、あくまでも、  
感性に優しく訴えるテイステイな  
商品の数々を提案して行きたいと  
思っております。



 INCORPORATED & REGISTERED IN JAPAN  
KINOSHITA  
PEARL  
CO.,LTD.

*Order Salon*

株式会社 木下真珠

〒650 神戸市中央区山本通1丁目7-7(北野坂)

TEL. (078)221-3170

10:00AM~6:00PM(昨年から木曜日も営業をしています)


●12月29日から1月5日までは休ませていただきます。

A HAPPY NEW YEAR  
本年もよろしくお願ひ申し上げます

貴婦人のように  
春



真珠・貴金属・毛皮・輸入婦人服

 **ムラ**

さんちカシティエレガンス ☎(078)391-3886  
神戸市中央区三宮町1丁目10番1号

甲子園店 ☎(0798)48-5218  
甲子園球場南・阪神パーク隣

本社 ☎(078)341-8041代  
神戸市中央区元町通6丁目7番8号 明邦ビル



# 私のいる風景

Vo.14

## シャネルスーツは エレガンスの代表

榎山 優子さん

(TV番組企画・制作  
榎山奨学財団理事長・種オンワード牧場社長榎山軌四夫氏次女)

「ココ・シャネルの本を読んだり、映画を見て、彼女の生き方に大変感動し、シャネルのファッションに憧れていました。初めて購入したのはカシミアのセーターで、7万5千円でした。自分のお給料をはたいたので、忘れもしません(笑)

この赤いスーツは両親からの誕生日プレゼントで、早速着て食事に行きました。友達の結婚披露宴やパーティには、ページのシルクのワンピースが重宝します。

シャネルはアクセサリ類のづくりも丈夫でセンスが良いので、除々に揃えたいですね。仕事ではいつもジーンズにスニーカーで走り回っていますが、年頃ですので、きちっとした服装も必要ですね」

大阪のTV局でアシスタントディレクターを勤めた後、フリーとなりTV番組の企画をたてたり、台本書きなどの制作を手がけている。イベントを題材にしたドキュメント番組を得意としているが、目下花嫁修業中の身でもあるので、仕事はほどほどに、というところ。さすがに令嬢の風格が漂う新春の装いだ。

(ピストロ・ドゥ・リヨンで)



〈4階シャネルブティック〉



DAIMARU KOBE

電話 (078) 331 - 8121

# 花よりも華、エンバの毛皮。

新年おめでとうございます。

昨年12月オープンいたしましたエンバ神戸本店、  
三宮店ともども、お引き立てくださいますようお願いいたします。  
エンバ恒例「新春大バザール」を開催いたしております。  
お早めのご来店をお待ちしております。



宮内庁御用達

G I N Z A  
毛皮 **エンバ**

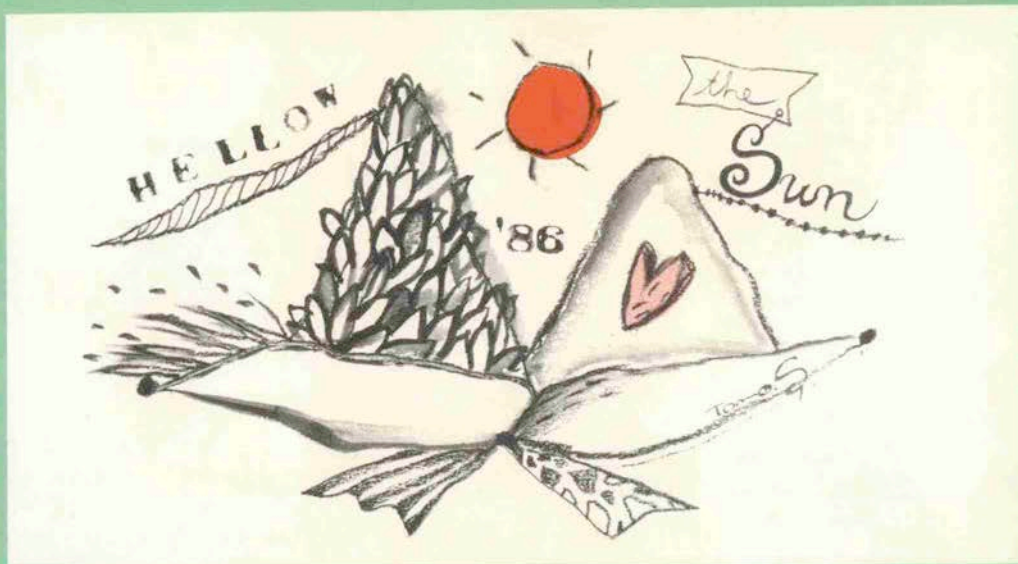
品質と価格・アフターケアを保証する 専

毛皮エンバ神戸本店 ● 国鉄三宮駅山側 ☎ 078(222)3556代  
毛皮エンバ三宮店 ● センタープラザ西館3F ☎ 078(392)2328

これは神戸を愛する人々の雑誌です  
 あなたのくらしに楽しい夢をおくる  
 神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ  
 これは神戸っ子の手帖です

1月号目次 ● 1986・No.297

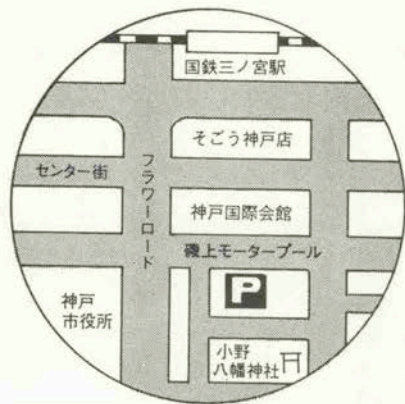
- 表紙／小磯良平  
 セカンドカバー／世界の物売り(13)／中西 勝  
 9 神戸っ子'86／舟木かな子／塚田照夫  
 13 コウベスナッパ  
 ある集い／神戸青年会議所'86リーダー  
 15 詩画集／四季詩／多田智満子 絵／石阪春生  
 16 神戸の物語／緒方しげを  
 わたしの意見／尾上久雄  
 18 随想／神戸 順・竹内恒造・福村恵子 カット／上尚司  
 地域文化輪／水谷晴介  
 35 新春エッセイ／鳥 京子 カット／早川良雄  
 36 コウベ味な旅'89／野村芳太郎 カット／石阪春生  
 38 KOBÉ音楽夜話'89／小橋 潔  
 40 新春インタビュー／新野幸次郎・柏井健一・木口 衛  
 42 第10回神戸文学賞・神戸女流文学賞選考座談会  
 49 経済ポケットジャーナル  
 53 キャンペーン座談会／コンベンション都市神戸を考える  
 58 タカラヅカ対談 大関弘政&高夕巴 & 秋篠美帆  
 68 話題のひろば／大月真珠新社屋  
 元町三番街・南京街  
 72 KOBÉ FASHION SPOT  
 神戸のお嬢さん／桂 好美・王晴瑛  
 アーチストになりたくてなれなかつたデザイナーの아트／  
 中村一夫(DNA)  
 110 コーヒーブレイク  
 動物園飼育日記(2)／亀井一成  
 114 小山乃里子の華麗なる男のインタビュー／朝比奈千足  
 117 神戸の集いから  
 スポーツエッセイ／宇和川令子  
 ルック／スポーツ  
 122 有馬歳時記(1月)  
 神戸を福祉の街に(145)／橋本明  
 ふたたびプロフェッサーPの研究室／岡田淳  
 128 さらさらしゅ・ぱつく(63)／淀川長治  
 132 KOBÉ MODERN CULTURE  
 神戸百貨会だより  
 136 ポケットジャーナル  
 びつといん  
 143 小関三平のやぶにらみ見聞録／村山リウさんを訪ねて  
 144 小説／オレンジ色の闇 舟木かな子 カット／岩島雅夫  
 150 魔女学入門／文・ソソキリテース 絵／マダム島世子  
 174 海・船・港／コロンビア船  
 カメラ／米田定藏・橋本英男・池田年夫・坂上正治・松原卓也



カット／杉山 知子



ビジネスに!  
ショッピングに!  
ご利用ください

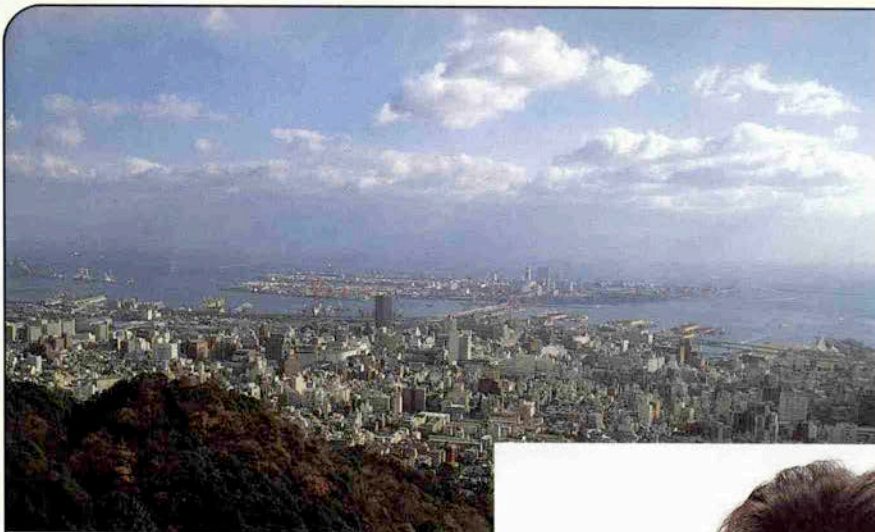


## 磯上モータープール

● 収容台数 350台  
● 月極 駐車可  
● 年中無休  
(神戸国際会館前) TEL (078) 251-2662 (8:00A.M.~11:00P.M.)

新年 謹賀

1986



明日を見つめる

神栄石野証券



モデル/西田昌古



あけまして  
おめでとうございます

にしむら珈琲北野店開店以来、  
「月刊神戸っ子」の誌上で十一年  
間にわたり、素晴らしいゲストの方  
々をお迎えし、それぞれの「いい出  
会い」に心より感謝しております。

今春四月、大阪城松下ツインタ  
ワー21、一階メインギャラリーへ  
の出店が決まり、又神戸市内にも  
大型店舗の開店計画が進んでおり  
ます。当分この誌上ではお目にか  
かれませんが、「にしむら」らしい  
店づくりにも全力を注いで励みたい  
と思っております。

新しい年を迎えて、今後共々に  
しむら珈琲店”をお引ききたて下さ  
いますようお願い申し上げます。

にしむら珈琲店  
シエ・ラ・メールにしむら

川瀬 英代子

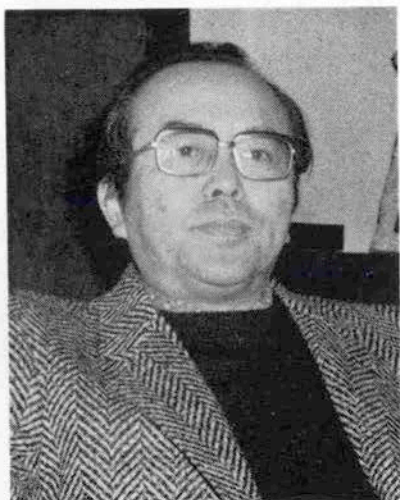


☆私の意見

# チッター・アペルタへ 積極的姿勢で

尾上 久雄

△京都大学経済研究所長兼教授▽



太政官布達は大部分、明治十八年廃止されましたが、官吏は勤務地の一里以内に住む規則は廃止するのを忘れたままになっています。でも私は神戸が好きなので京都まで通っています。私自身非常に不便に思いながらも神戸に住んでいるのは神戸には大変な魅力があるからです。

私が先輩の教授のところへ伺うと、彼の奥さんが私を見て「いかにも神戸から来た人に見える」というんです。南の斜面に陽がさんさんと照って海が見えるイメージに彼女のあこがれがあるというのですが、私の住んでるところがまったくそういうところですね（笑）。

私は景観からみても人間社会的にみても神戸は開かれた都市だと思っています。イタリア語でチッター・アペルタ（開かれた都市、または無防備都市）という言葉がありますが、人文社会的には神戸が日本のチッター・アペルタだと思います。つまり日本人が明治以来文明を開いた基地だったところでしょう。南向きの斜面に陽が当たって海が見える。まさにチッター・アペルタです。

国内的に言っても、神戸人のグループが他を排除してよせつけない、神戸人が独占するようなことはなくしていきたくいですね。

これからも外国人留学生、外国の文化情報の受け入れにいままで以上に積極的に取り組んで、文化面だけでなく、企業、経済的取り引きにおいて向こうから来るだけでなくこちらからも出かけていく。たとえば見本市や使節団の編成、国際学会の誘致・開催など市民ぐるみで大いに活発にやってみよう。

今でもかなりやっていますのですが、どうも長期構想がなくて、場当たり的な気がします。世界の求めているものが何か、日本が与えることは何か、その中で神戸はどこに位置づけるのが良いか、を充分考えて国際都市神戸を発展させていきたいものです。そうすることで、神戸の文化と産業全体に波及効果が現われてくると思います。

おめでとう! '86 1/10(金)~1/15(祝)

『成人の日』特別メニュー

フランス料理 (1F) スカイレストラン  
¥10,000 (税・サ別)

イタリアンレストラン コモ (B1F)  
¥3,000・¥5,000 (税・サ別)

ステーキハウス (B1F)  
¥5,000・¥8,000 (税・サ別)

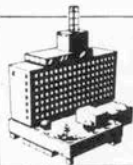
北京料理 海風飯店 (B1F)  
お2人さま  
¥6,000・¥9,000 (税・サ別)



お寿司 白扇 (B1F)  
¥8,000 (税・サ別)

西洋料理 エリートセブン (1F)  
¥3,000 (税・サ別)

金蔵 石庭 (B1F)  
¥10,000 (税・サ別)



神戸オリエンタルホテル

神戸市中央区京町25番地  
TEL 078(3331)8111

'86 A HAPPY  
NEW YEAR



新しい年に新しいメガネ  
本年もどうぞよろしくお願ひします

 神戸眼鏡院

元町店・元町3丁目 ☎(321)1212代表  
三宮店・さんちかローザアベニュー ☎(391)1874~5

# 随想



「午後」 / 上 尚可

## 筒井康隆先生の教訓

神田 順

△作家△



第三回小説新潮新人賞を受賞した。十一月十五日に授賞式があった。席上、選考委員の筒井康隆先生と井上ひさし氏が親切な助言を下された。

ここで筒井「先生」と書くのは先生は神戸在住のため、ひよっとするとこれを読むところがあるかも知れず、すると「先生」が先生の目に留まり「なに、井上が氏で我輩が先生か、愛い奴じゃのオ」とな

り、以後何かと面倒を見て貰えるのではないかと思うからで、他意はない。もしこれが東京地方の出版物であれば「井上先生と筒井氏」と書くことになり、全国版であれば「井上先生と筒井先生」と書き、北海道や九州版だと「井上氏と筒井氏」ぐらいで、小笠原や沖縄まで離れるとこれはもう勿論「井上と筒井」となり、台湾・越南・唐・天竺辺りでは「私が面倒を見ている井上君と筒井君」であり、ジャワ・スマトラでは「私の弟子の井上と筒井」で、アフリカ奥地の現住民村発行の「セレンゲティっ子」では「ハニム・メケテ・ンザ

グマ・ナマキ・ガッキ・ドンモ」（私の弟子であるところの生意気な餓鬼共）となり、もう名前さえ出て来ない。

そんなわけで筒井先生は、授賞会場の片隅で、先輩作家たちを羨ましげに横目で見ながら、やがて己れが白鳥となって大空を舞い其奴等を見下す日が来るとも知らずに独りイジメに耐えている可哀想な醜いアヒルの仔のように縮こまって震えながらローストビーフやスモークサーモンや茹で卵や太巻き寿司を頬張っていた僕に、畏れ多くも御自ら御御足を御互い違いに運ばせられ御玉体を擦り寄せ給いて大御言をば垂れ給うた。

「自分の書きたいと思うことだけを書けばいいんだよ」ところが、その結果がこの文章である。

法は人を見て説かねば、このような無残なことになるという教訓にはなっただけ。

## 真珠と北窓光

竹内 恒造

△田崎真珠専務取締役△

建築物は建築主の意図する使用目的に合致したものであ



上/田崎真珠本社（ポートアイランド）

下/田崎真珠本社専務室にて筆者

ると同時に、その置かれた環境とも見事に調和するものでなければならぬのは言を俟たない。

真珠会社という特殊な業種故の必須条件も多々ある。製造工程では北窓面積を必要とすることが、その内でも最も重要な条件である。真珠のあの柔かな色調、光の干渉によって生ずる真珠光沢、及びデリケートな肌艶を見分けるのに、北窓光の変化の少いスペクトル分布の片寄らない天空光線が要求される。

そして真珠を取り扱うということは世界中の消費国にはほぼ一元的に供給する立場であることから、又規格化が不可能であるという商品特性からも、すべての取引が売手側買手側が対面して行われる

という商習慣であり、海外各国のバイヤーがこのビルを訪れるのである。故に、その商品の優秀さと企業の信頼度を表現する舞台装置の役目をも社屋が担っている。

一方直接小売の店舗展開をしている事業部を併存しているので一般消費者のミセスからヤングレディ・OLの方々にも気安く出入りが出来て、ファッションタウンと銘うった神戸市の意向にも添って：と。

動線計画にしても一般オフィスビルと異なり真珠の加工場を内包しているのでセキュリティに配慮せねばならず、それに見学コースを設定し展示場もホールもショッピングコーナー等々とパブリックなゾーンをどう関連させるか、余りガードを硬く厳しいものにしてはイメージが良くない。解決策として入口とロビーをプライベートゾーンとパブリックゾーンとにセパレートし並列に構成し双方の動線がクロスする接点にはテンキー式の暗号にて開閉する監視装置は出入口を設けることにし

た。BFの駐車場は上下二段式であるが、下段の車を動かさずに上段の車を出し入れできる方式を採用するか、水洗トイレの洗浄水には真珠を洗うのに使用した水を再利用することでささやかな省資源を心掛けるとか工夫もしている。

ビルの外装もご覧の通り真珠色光沢のあるラスタータイルを特注した。お陰様で真珠会社らしいビルで機能的にもユニークであるとして、小さな建物であるにもかかわらず、この度建設業協会賞の受賞という昇界最高の榮譽に輝いた。建設のプランを練り実物として完成させることで自分の考えを確認するというプロセスを楽しむ趣味の私として苦勞の甲斐ありと感激している次第。

ビル施工の着手初期に病を得て長期入院を余儀なくされ病床から指示し打ち合わせにも関係者に来院願うなど、設計担当の日建設計のスタッフ及び施工の熊谷組の方々にご迷惑をお掛けしたが、絶大なご協力に心より御礼を申し

上げたい。

現代の難病といわれる一つに取りつかれたが、此の建物完成させるといふ想いが「生」への執着心となり、万分の一の例といわれる社会復帰をビル落成の日にタイムイングを合わせ強行退院で果し得たのも運命を感じさせる、思いついた深い二年前のことである。

## ひとつだけの「名作」

稲村 恵子

△主婦・「大阪人」賞入選▽



「大阪人」賞贈呈式にて（中央が筆者）

受賞（受賞作「僕の彼女」から二カ月後、出版社の方が来られて書いて見ませんか、と声をかけて下さった。

その時、手持ちの拙作をお見せしたところが、「あの作品と同じ人が書いたとは思えないほど、ヘタクソですね」

とのご宣託。

ごく最近まで、句点の打ち方はおろか、原稿用紙の使い方も知らなかったのである。だから恐いもの知らずで、百枚書き上げた。

——とまあ、ここら辺まで  
は悩んでいるようでも暢気だった。自分では会話中心の、半分シナリオに似たテンポの早い小説をもくろんだ、つもりでいた。しかし自信はあろう筈もなく、東京に送るまでに、月刊O誌の編集長に目を通していたのだ。

結果は「百枚のうち、とれるのは一枚か二枚」。あげく「誰でもひとつだけは名作が書ける場合があるそうです」とまで言っていた。この日、晩御飯は食わず、子供は風呂に入らず、悄然として夜を明かす。

かくて、その日から今日まで、いまだ立ち直れる気配はない。要するに書くことが何もないのである。受賞した作品を書いた頃の自分と現在の自分とが同一人物だとは、もはや信じられない状態である。昨年の冬は、頭の病気だ

ったのだろうかと言えよう。

それなら、もう一度病気にいかれば問題は解決するわけだが、そうは問屋がおろさない。頭の中が妙に明かるく澄み渡ったり、また暗く沈んだりと明滅し、一向に燃え上がってこない。

先日「市民の学校」の終了式のと、校長先生に駄作のご批評をおおいでいるうちに、帰る時刻を失念し、気付いた途端、大慌てで外へ出た。子供のことを忘れていたのである。そのうえ走って帰る途中、精動賞に戴いたコップを箱ごと地面に落としてしまった。

その夜、粉々になったコップを手に取り、うちひしがれて咬いたものである。

「書き直そうか思ってる矢先に、コワれてしまっやなんて。もうあかんわ。これは、きつと才能がないという暗示やねんわ」

この時、寝ころんでテレビを見ていた夫は、面倒臭そうに眉をしかめて曰く。

「そんなもん、最初っから、あるかっ」





# 迎春

今年もよろしくお願ひします

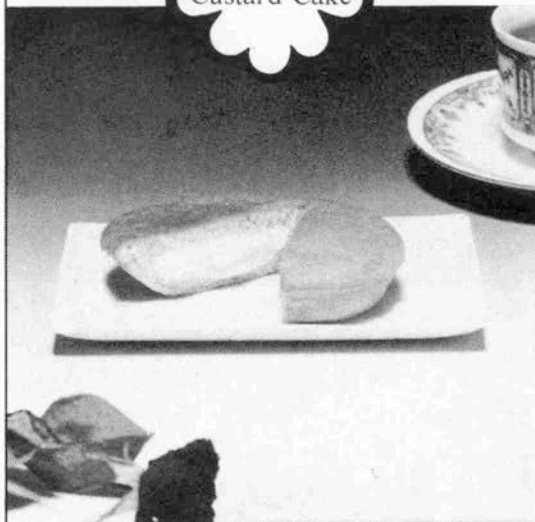
新発売

High Quality

Favorite

人気もの

Custard Cake



1ヶ ¥90

10ヶ入 ¥1,000 (進物用)

—— 北 欧 の 銘 菓 ——

**ユーハイム・コンフェクト**

本社 神戸市中央区熊内町1-8-23 ☎221-1164

— 美しきには理由があります。 —

①②

着物の美しさは着る人の  
心がけしだい。

- 雨や泥ハネ、コーヒーにお酒などの水ものには要注意。
- 火や高温に近づいてはいけません。
- 脱いだ後は、必ずハンガーにさげて湿気抜きを。
- しまう前には必ず全体をチェック。シミ、キズ、ほつれがあれば専門家にご相談ください。



SINCE 1933



本社/神戸市灘区配田町1丁目2-16

1986年 本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

本社/078-851-2440 ■大阪支社/06-853-1332 ■ローブ・ニシジマ/078-332-2440  
山手店/078-221-2440 ■宝塚店/0797-72-0810 ■リフォーム・フルフル/078-221-9110

△その74▽  
大学祭と共催した

「ふくおか21世紀」  
のためのワークショップ

水谷 頌介 △都市計画家・建築家▽

福岡市は新しい総合計画づくりの前提として「ふくおか21世紀プラン懇談会」を発足させ、その討

議にあわせて、レディスシンポジウム85など市民フォーラム活動をすすめてきた。そして、さらに、「ふくおか市民ワークショップ」

を、市内の6大学の秋の大学祭と共催して展開した。

すべて、主催が市当局と各大学の委員会、協力が各大学当局というくみたてである。まず、△街づくりと企業の役割▽をゲストパネラーにパルコ社長の増田通二氏

を見たか▽（於・西南学院大学）と、△アジアの中の福岡▽が朝日ジャーナル編集長筑紫哲也氏を招いて（於・九州大学）、という企画だった。

私は、△君は海を見たか▽に、パネラーとして出席した。埋立てが進む博多湾の今後に関心や不安が高まり、古代以来の博多湾と福岡の町の歴史をふり返ってみようという「博多湾学」なる連続市民講座も開催されている時勢にかなうテーマである。

私の発言は、比較都市研究をとおして考えている、神戸は六甲山、広島は太田川、福岡は博多湾（海）という三つの都市の基礎の特徴をいかした町づくりのキーワードだった。

毎日登山や市民全山縦走を迎えられている六甲山と市内の6本の川辺が美しい広島にくらべて、△漢倭奴国王▽の金印が出た志賀島も浮かぶ博多湾がまだ福岡の現代のシンボルになりえていない。

パネラーとして西南学院大学の学生代表が学生達のテーマへのアンケート結果を携えて発言したり、OBも加わって在学生・市民など積極的な参加が目立った。

「学び創る都市」（現存の総合計画・都市像のテーマの一つ）にふさわしい一連のシンポジウムだった。



「ふくおか21世紀プラン懇談会」の討論風景

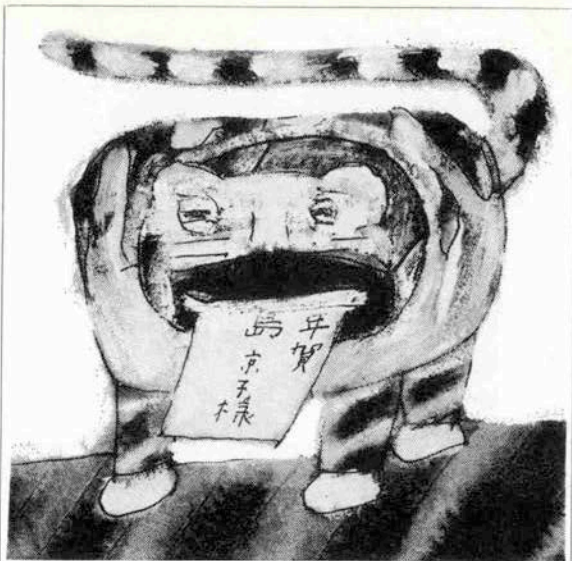
を招いて（於・福岡大学）、天神再開発の話題も多い昨今、熊本など九州各地からも聴衆が詰めかけたという。△都市のデザイン▽を大阪大学の上田篤氏を招いて（於・九州産業大学）、△イメージ・人間文化▽がグラフィックデザイナー粟津潔氏、九州芸術工科大学教授岡田晋氏（於・九州芸術工科大学）、△福岡の食文化▽は作家で「なんとなくクリスタル」の田中康夫氏をゲスト（於・福岡女子大学）、そして、「限りなく透明に近いブルー」の作家村上龍氏をゲストの△君は海

## □新春随想

# 気がかり

島 京 子 〈作家〉

カット／早川良雄



から、相手を推測してみようと思う。言葉は個人的だ。

「なにか、おもしろいことはありませんか。あったら、寄せてや」

これはまず男だろう、とは思う。そしてむろん関西に居住する人だ、と思う。そして、おもしろいことに感ずる人だとも思うのだが、ふり返ってみれば、こんな人は多く、またこの推測がまちがってるかも知れない、と思いはじめる

(いったい、誰やの)

心中で、どこから運ばれ、わが目の前にある一枚のがきが、きりもなく広がり、とらえどころもないものに思えてくる。

「ことしこそ、山へ登ろう。六甲山でもいいから、誘って下さい」

年に一回か二回、グループ登山をしていたが、

頂く年賀状のなかで、毎年、つくづくと首をひねって眺め、時間をたっぷりと費して、あれこれと推測まがいのことをする、いや、しなければならぬ賀状がある。

誰が、年頭のお祝いを送ってくれたのか、不明のものである。名前がない。住所もない。

名前がなく、住所だけ書かれているのは、すぐ判明するが、どちらもないのは、あと、ひとまず頼るのは消し印である。だが、官製年賀はがきは、消しスタンプも省略であるから、残る手がかりは、字体ということになるうか。

ひと目見て、書き手のわかる字というのも、なるほどかなり多いものだ。だが、右のように、書いた人を判じるために、字体を眺めるとき、ふしぎに書いた人が浮んでくる、ということはない。

さあ、困るのである。あとは、そえ書きの言葉

これは誘いをかけても、都合がつかなかった人ならん、誰だろう、考えたがついに判らなかつた。

では、賀状をやりとりしている人で、その年名前の見当らなかつた、こんな目算を立てて、当ってみようとした。だがこれも

(判ったア)

ということには、いつもならないのである。どういうわけだろう。

「姉が、いつもお世話になっています。私は茅ヶ崎に住む不肖の弟ですが、このほど御著拝読しました——」

本の感想批評がていねいに書かれた賀状があった。返事を出したく思った。茅ヶ崎に住む人で、姉なる人が私の友人か知人、となると案外、判るかも知れないではないか、と勇躍し、弟がいるとかねてから聞いていた女性に、折あるごとに聞いてみた。

「茅ヶ崎に弟さんが、住んではいらっしやいませんか」

だが、当りをつけた友人知人のなかに、茅ヶ崎に弟が住んでいる、という人はいなかつた。この年賀状は、かなりあとまで気になっていたもののひとつであつた。

年賀状が「年賀特別郵便」として特別扱いになり、一定期間に局がひきうけ、元日から配達してくれるようになってから、暮の忙しいときが、いっそう忙しくなつた。

忙しいから、名前も書き忘れる。私も忘れて、あるいは書いたつもりで出しているかもしれない。

年賀状の総数が多いのも、社会が富み、平和の

しるしであろうが、年々多くなつて行くところをみると、むかしは少なく、賀状よりも出向いて年頭の挨拶をする人が多かつた。

明治二十五年一月元日の樋口一葉の日記をみると、賀状二枚、年賀客八名、一葉の方からも、

「母君近隣に祝詞のべに参りたまふ」というわけだが、これもつとむかし、明治十五年ごろになると、交際のひろい家でも、年賀状は来ず、やたらに人の出入りが多かつたことが記されている。

紀州藩の学校「学習館」の督学(学長)川合梅所(はいしよ)の妻小梅は、明治二十二年(一八八九)八十六歳で死去した当時のインテリ女性だが、克明でぼう大な日記を残した。

その小梅日記を見ても、正月門(かど)禮、庭先まで挨拶にくる人、座敷で一酌の人多く、なかには「酒は方々でたべ候に付、茶くれと言ゆへ、菓子出ししばらく咄す」など、書くのが好きな小梅も、年始状をどこかへ出したという記述はない。

私が生子のころにも年始まわり、という風習があり、各家の玄関先には塀風が立てられ、松竹梅の前に、年始客の名刺入れのための盆が置かれてあつた。

「おめでとうございます」と声をかけ、名刺を入れてくるだけで、家人は顔を出さずともよかつた。

むかしといまとは人口の総数も違う。人々の交際の範囲も違う。年賀状は便利なものだ、いまをありがたと思おう。差出人、賀状を下さつた人が不明でも——いや、これだけはやっぱり気がかりなのだ。

# 忘れ得ぬ

## ステークの味

野村 芳太郎 映画監督

カット／石阪春生

神戸駅正面に、京都太秦から運ばれて来た超大型の撮影用クレーンが位置につく。

エキストラの数は六〇〇名、それぞれが、助監督の指示に依り、終戦直後の扮装で集まって来る。

昭和三十年の春、まだ肌寒い夜。松竹映画「亡命記」の神戸駅前ロケ。エキストラとして参加、

あるいは、あのロケを見に来られた方が、今でも神戸に大勢おられるのではないだろうか。

その時、私はまだ三十代、監督になってやっと三年目、当然張り切っていた。

神戸駅の最終電車がホームを離れるのを合図に三〇〇キロ以上のライトが一勢に点灯して、いよいよ撮影が始まる。

テスト!!

私は大クレーンの頂上から大声で怒鳴り、いそいでカメラをのぞく。

眼の前に駅の大時計、針が六時を指そうとしている。勿論、今は夜中。撮影のため時計の針を遅らしてある。

私は一呼吸、そして、ヨイ、ハイ!!

時計の針が、正に六時を指す。レンズを通して

時計が遠ざかり、画はぐんぐん広がり、やがて、

駅の全景になる。当時まだズーム・レンズといっ

た便利なものはない。すべてが人力。手の空いて

いるスタッフ全員がクレーン車を押してバックさ

せ、クレーンの尻を引き上げると、カメラはぐん

ぐん高くなる。レンズからは駅前が見え、子供

の靴磨きの姿、そしてパンパンの群れ、そこにジ

ープがつきMPがおけると、パンパンはさっとそ

の場から逃げ出す。勿論、全部エキストラの芝居。

そのフレームに、汚れたレインコート、買物袋を

持った女が子供の手を引いて入って来る。その

女、岸恵子扮するヒロインの後ろ姿に、ぐんぐん

カメラが近づく。

スタッフは全力で女におくれまいとクレーンを

押す。大型クレーンが、そのまま女を追って駅の

構内にドンドン、ドンドン這って行く。

女は開札口に近づく、折りしも復員姿の兵士の

一団が開札口を出る、出迎える人達と抱き合い喜

び合う姿。待つ男は現われず、女は子供の手を引

いたまま、じっと復員兵の来た方向を見つめてい

る。

カット!!

これが、「亡命記」というメロドラマのファー

スト・カット。主演は岸恵子と佐田啓二。戦後、

大ヒットを記録した「君の名は」につづいての大

型メロドラマの第二弾、神戸ロケの後に、戦後初の

の香港ロケが待っていた。

徹夜でこの一カット。くたくたに疲れて宿に帰

が、もう名前は思い出せない。三階に私の部屋があり、廊下を歩いていると、真っ直ぐ歩いているつもりが、柱に肩がふれる。どうやら建物自体がかたむいてるらしい。それほど、大きい古い建物があつたので、あの辺は一部焼け残っていた様な気がする。

私が忘れ得ぬステーキを食べたのは、駅から西へ少し歩いた所、山陽本線が近くに見えたので、地図で見ると相生町五丁目というあたりではなかったかと思う。戦後のバラックの街並の中に、レストランというよりは洋食屋といった感じのその店があつた。

誰に勧められたのか、あるいはロケのあとで通りがかりで這入つたのか、とにかく喰べたステーキの味が忘れられず、誰れかにそれを喰べさせようと岸恵子、佐田啓二の二人に声をかけた。なにしろ「君の名は」のあとの二人。この辺は

あまり人通りのある街ではなかったが、それでも二人に気づいた人達が追つて来て顔をのぞき込んだりする。三人で逃げる様にしてその店の中に入った。店はバラックながら何処か落ちついていてどこかモダンで、神戸の匂いがある店。それもその筈、親爺さんは外国航路の客船のコックだったという、それが戦争で船がなくなり、御夫婦でこのお店を始めたのだときいた。

ステーキは今日は駄目よ。  
あっさりカミさんという。そんな、折角この二人を連れて来たのに、なんとかしてよ。カミさんは二人を見て、解つた様で、解らぬ顔で引きこみ、爺さんを連れて来る。

この店の肉は、あたしがえらんで買って来るのだが、今ある肉は、まだ三日早い、今日はシチュウで我慢しな。お客さん、この人達は誰れなんだい。私が二人を紹介すると、どうりで奇麗な顔してなさる、とカミさんが感心した様にいった。その日、目的のステーキは味えなかったが、シチュウも又うまかった。それ以上に、味のある御夫婦に逢えて岸君も佐田君も満足した様子であつた。あれからもう三十年がたった。あのステーキは本当にどんな味だったろう。でも、そのステーキに、思い出という味づけが加わるとそれはもう、どんな店のステーキより美味しかったと思えるから不思議なものである。

#### 〈筆者紹介〉



1919年、東京浅草生まれ。慶応義塾大学卒業後、松竹大船撮影所に入社。1984年松竹側より独立。昨年紫綬褒章を受章。「砂の器」で毎日映画コンクール監督賞、「事件」でブルーリボン監督賞、日本アカデミー賞最優秀監督賞他多数受賞。他の代表作に「鬼畜」「配達されない三通の手紙」「疑惑」「危険な女」など。

